



| | |
|------------------|---|
| Title | ポーランド語における地名ないし民族名起源の派生語 |
| Author(s) | 渡辺, 克義; Watanabe, Katsuyoshi |
| Citation | スラヴ研究, 39, 211-221 |
| Issue Date | 1992 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/5208 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | KJ00000113345.pdf |



ポーランド語における地名ないし 民族名起源の派生語

渡 辺 克 義

1. はじめに

フィンランド語では、地名に *-lainen* ないし *-läinen* を付加すれば、当該地の住民を表す派生語(名詞および形容詞)が自動的に得られる⁽¹⁾。2通りの接尾辞のうち、どちらが選ばれるかについては、母音調和の原則に従う。外国の地名に多く見られる、子音で終わるものについては、*-i* を付加したあとで、上の原則が適応される。

ところで、ポーランド語では、地名ないし民族名から派生する語彙は時に実に厄介な問題を引き起こす。フィンランド語のような簡便な表現方法がないわけではないが⁽²⁾、一般には新たな語彙を生むからである。スターリン時代、クラクフ郊外に *Nowa Huta* という産業地区の建設が始まったが、この形容詞形をめぐって議論が続いたことがある。すなわち、*nowohutnicki* か、*nowohucki* か、*nowohuciański* かと⁽³⁾。このように、地名ないし民族名から派生する語彙はポーランド人にとっても簡単に処理することのできない問題であり、言語学的研究対象としてもクローズアップされることになる。

ポーランド語が「簡便な」方法を避けて、あえて「簡単に処理することのできない」造語法に傾斜するというのは、一見、時代に逆行することであり、合理性を欠くことのように思われる。しかし、反面、こうした派生語が存在すると、トートロジー(類語反復)的表現を避けることができるというメリットがある。様々な難点を抱えつつも、ポーランド語が容易に簡便な表現方法をとらない理由の1つを、ここに見出すことができる。

ポーランド言語学会において造語論研究は、ロズヴァドフスキが1904年に発表した「単語の二元性」(*dwuczłonowość wyrazów*)という理論⁽⁴⁾により、確たる地位を得た。しかし、研究が飛躍的に進むのは、第2次世界大戦後になってからである。ポーランド語学のなかでは、比較的後発の研究領域といえるであろう。研究史⁽⁵⁾を概観するに、個々の地名ないし民族名からの派生語を問題にしたものはいくつかあるが、この種の造語法を体系的に分析しようと試みたものが意外に少ないことに驚かされる。

本稿は、ポーランド言語学会での研究成果も踏まえて、地名ないし民族名から派生するポーランド語の語彙を抱括的に検討しようとするものである。以下、まず住民名(男性形)から派生の形態を捉え、次いで住民名(女性形)がどのようにして得られるのかを分析し、最後に形容詞形と他の形との関連について整理・分類していく。

2. 住民名(男性形)から見た派生の形態

接尾辞の種類により、次のように分類できる。

2. 1. -anin型

派生形容詞中に形態素の一部の-an-が現れるか否かにより、2分できる。

2. 1. 1. 住民名(男・女性形)においては形態素の一部の-an-が現れるが、形容詞形ではそれが消失するもの

例: Łużyce - Łużyczanin - Łużyczanka - łużycki

Mołdawia - Mołdavianin - Mołdawianka - mołdawski

Morawy - Morawianin - Morawianka - morawski

ポーランドの地名の多くがこの型に属す⁽⁶⁾。

例: Łódź - łodzianin - łodzianka - łódzki

Szczecin - szczecinianin - szczecinianka - szczeciński

Tarnobrzeg - tarnobrzeżanin - tarnobrzeżanka - tarnobrzeski

これに対して、外国の都市については、そもそもこうした派生語がないか、あるいはあっても -czyk 型に属すものが大半であり、-anin 型は極めて珍しい。

例: Paryż - paryżanin - paryżanka - paryski

Rzym - rzymianin - rzymianka - rzymski

Wenecja - weneccjanin - weneccjanka - wenecki

2. 1. 2. 形態素の一部の-an-が、派生語のすべての形において保持されるもの

例: Kampucza - Kampucznanin - Kampuczanka - kampuczański

Kostaryka - Kostarykanin - Kostarykanka - kostarykański

Meksyk - Meksykanin - Meksykanka - meksykański

2. 1. 3. -anin 型変種

Azerbejdżan - Azerbejdżanin - Azerbejdżanka - azerbejdżański

は一見、2.1.2.型であるかのような印象を与えるが、この場合の-an-は語幹の末尾とも考えられるので、同一には扱えない。もしこれが2.1.2.型であるならば、次のようにならなければならないはずである。

Azerbejdżan - Azerbejdżanianin - Azerbejdżanianka - aberbejdżaniański

ポーランドの言語学者クレヤは、この事例に関し、語幹の-anが接尾辞中の-an-と融合してしまい、一方が脱落したものとして考えている。彼はこれを裏付ける例として、starostwo ≪ starosta + stwo、を挙げているが⁽⁷⁾、示唆的である。

クレヤはさらに次のように主張する。Ghanaの住民名(男性形)としては、GhańczykとGhaninの両方の形が認められているが⁽⁸⁾、Ghańczykの方を優先すべきであるとしている⁽⁹⁾。-anで終わる場合、

Sudan - Sudańczyk - Sudanka - sudański

のように、-czyk 型が支配的であることを理由として挙げている⁽¹⁰⁾。

クレヤの主張を検討するうえで最大のネックは、語幹が-anで終わる地名が存在しても、多くの場合、派生語は全く形成されず、結果的に、-czyk 型が優勢であるのか否かの判断規準に乏しいことである⁽¹¹⁾。Anszan、Asuan、Cinan、Durban、Erewan、Medan、Pusan、Wuhanなどは必ずしも小都市ではないが、辞書等で派生語を確認することはできず、派生語は事実上存在しないものと思われる。

2. 2. -czyk 型

派生語中の「繋ぎの形態素」(morfem konektywny)の有無により、2分できる。

2. 2. 1. 「繋ぎの形態素」が現れるもの

「繋ぎの形態素」の種類により、さらに細かく分類することが可能である。ここでは主要なものを見てみる。

2. 2. 1. 1. 「繋ぎの形態素」-an-が現れるもの

例：Birma - Birmańczyk - Birmanka - birmański
 Malta - Maltańczyk - Maltanka - maltański
 Tybet - Tybetańczyk - Tybetanka - tybetański

幾つかの変種が観察できる。

例：Haiti - Haitańczyk - Haitanka - haitański…………… ①
 Laos - Laotańczyk - Laotanka - laotański …………… ②⁽¹²⁾

①の場合、地名 Haiti が不変化名詞である点が特殊である。このような-iで終わる不変化名詞の場合、2.2.1.3.型に属するものが圧倒的に多い。

②の場合、語幹で s⇒t の子音交替がみられる。

ところで、2.1.2.型と2.2.1.1.型との違いは、住民名(男性形)だけであるが、時にはその両方が認められている場合もある。

例：Afryka - Afrykanin/Afrykańczyk - Afrykanka - afrykański

この場合、Afrykaninの方が一般的とされる⁽¹³⁾。

2. 2. 1. 2. 「繋ぎの形態素」-yj- (-ij-)が現れるもの

例：Cypr - Cypryjczyk - Cypryjka - cypryjski
 Monako - Monakijczyk - Monakijka - monakijski
 Uganda - Ugandyjczyk - Ugandyjka - ugandyjski

ここでも幾つかの変種がある。

例：Irak - Irakijczyk - Irakijka - iracki …………… ③
 Wielka Brytania - Brytyjczyk - Brytyjka - brytyjski …………… ④

③の場合、形容詞形は地名から直接派生している(4.1.参照)。

④の場合、地名の後半部から派生語が出ている⁽¹⁴⁾。しかも、語幹に直接「繋ぎの形態素」が付いているわけではない。なお、Wielkobrytyjczyk や Wielkobrytyjka などの形は認められていないが、形容詞形 wielkobrytyjski は誤りとはされない⁽¹⁵⁾。

2. 2. 1. 3. 「繋ぎの形態素」-j-が現れるもの

例：Bali - Balińczyk - Balijska - balijski
 Gwinea - Gwinejczyk - Gwinejka - gwinejski
 Mali - Malińczyk - Malijska - malijski

ここでの変種には次のようなものがある。

例：Fidzi - Fidzyjczyk - Fidzyjka - fidzyjski …………… ⑤
 Tanganika - Tanganijczyk - Tanganijka - tanganijski …………… ⑥

⑤の場合、派生語で -dzy- という音結合に変わっており、ポーランド語化している。

⑥の場合、語幹の -k が落ちている。

2. 2. 1. 4. その他の「繋ぎの形態素」が現れるもの

以上の他に、-ej- (例: Europa - Europejczyk - Europejka - europejski)、-en- (例: Genua - genuńczyk - genuenka - genuński)、-wian- (例: Peru - Peruwiańczyk - Peruwianka - peruwiański) などの「繋ぎの形態素」が現れるものがあるが、その数は少ない。

こうした「繋ぎの形態素」の形を決定するうえで、しばしば影響力を及ぼしているのがそのラテン名である⁽¹⁶⁾。

例: azjatycki < Asiaticus
budapeszteński < Pestensis
neapolitański < Neapolitanus

2. 2. 2. 「繋ぎの形態素」が現れないもの

例: Argentyna - Argentyńczyk - Argentynka - argentyński
Ekwador - Ekwadorczyk - Ekwadorka - ekwadorski
Pakistan - Pakistańczyk - Pakistanka - pakistański

次のような変種がある。

例: Dania - Duńczyk - Dunka - duński ⑦
Luksemburg - Luksemburczyk - Luksemburka - luksemburski ⑧

⑦の場合、語幹で a⇒u の母音交替が見られる。

⑧の場合、派生語で語幹の -g が脱落している。

どのようなタイプの地名から「繋ぎの形態素」を必要としない -czyk 型の派生語が導かれるかについては、一般論は得がたい。-gia、-landia、-nia で終わる地名については、そのほとんどが「繋ぎの形態素」を必要としない -czyk 型になることが分かっているが⁽¹⁷⁾、それ以上については、一定の法則性すら見出せない。例えば、-ria で終わるものひとつとっても

Algeria - Algierczyk - Algierka - algierski (2. 2. 2. 型)
Bułgaria - Bułgar - Bułgarka - bułgarski (2. 3. 1. 1. 型)
Nigeria - Nigeryjczyk - Nigeryjka - nigeryjski (2. 2. 1. 2. 型)

など、その派生のパターンは実に多様である。

また、-czyk 型と -anin 型のどちらになるのかという、より大まかな分類にしても、-ja で終わるものには -czyk 型が多い、という漠然としたことしかいえない⁽¹⁸⁾。

2. 3. -∅型

もともになる地名がある場合と、そうでない場合(すなわち、民族名とその形容詞形だけしかないもの)とに2分できる。

2. 3. 1. もともになる地名がある場合

住民名(女性形)や形容詞形における「繋ぎの形態素」の有無により、さらに細かく分類できる。

2. 3. 1. 1. 派生語において「繋ぎの形態素」が全く現れないもの

例: Chorwacja - Chorwat - Chorwatka - chorwacki
Hiszpania - Hiszpan - Hiszpanka - hiszpański

Włochy - Włoch - Włoszka - włoski

-stan で終わる次のような地名も、この変種として捉えることができるであろう。

例：Afganistan - Afgan/Afgańczyk - Afganka - afgański/afganistański

Kazachstan - Kazach - Kazaszka - kazachski/kazachstański

2. 3. 1. 2. 住民名（女性形）で「繋ぎの形態素」が現れるもの

例：Grecja - Grek - Greczynka - grecki（「繋ぎの形態素」-yn-）

Persja - Pers - Persyjka - perski（「繋ぎの形態素」-yj-）

2. 3. 1. 2. 住民名（女性形）と形容詞形とで、「繋ぎの形態素」-yj-（-ij-）が現れるもの

例：Belgia - Belg - Belgijka - belgijski

但し、この場合住民名（男性形）として Belgijczyk という形も一応認められている⁽¹⁹⁾。クレヤは、「繋ぎの形態素」が一度適応されたならば、派生語のすべての形で保持される傾向にある、と主張する⁽²⁰⁾。もし彼の説が正しいとすると、将来Belg という形は消滅することになるだろう。

ここには、変種として、

Kurdystan - Kurd - Kurdyjka - kurdyjski

も含めることができるであろう。

2. 3. 2. 民族名とその形容詞形しかないもの

もともになる地名がないものは、すべてこの-∅型に属す。

民族名（女性形）並びに形容詞形において、「繋ぎの形態素」が必要か否かにより、さらに2分できる。

2. 3. 2. 1. 「繋ぎの形態素」が不要なもの

例：Ajnos - Ajnoska - ajnoski

Cygan - Cyganka - cygański

Eskimos - Eskimoska - eskimoski

2. 3. 2. 2. 民族名（女性形）と形容詞形とで、「繋ぎの形態素」を必要とするもの

例：Drawida - Drawidyjka - drawidyjski（「繋ぎの形態素」-yj-）

Druz - Druzyjka - druzijski（「繋ぎの形態素」-yj-）

Szerpa - Szerpijka - szerpijski（「繋ぎの形態素」-ij-）

上に見るように、住民名（男性形）が-a で終わっているものもある。

ここには、次ぎも変種して加えてよかろう。

Żyd - Żydówka - żydowski（「繋ぎの形態素」-ów-（-ow-））

2. 4. その他

-anin, -czyk、-∅型以外には、

Austria - Austriak - Austriaczka - austriacki（-ak型）

Czarnogóra - Czarnogórzec - Czarnogórka - czarnogórski（-ec型）

Anglia - Anglik - Angliczka - angielski（-ik型）

Litwa - Litwin - Litwinka - litewski（-in型）

Polesie - Poleszuk - Poleszuczka - poleski（-uk型）

Łotwa - Łotysz - Łotyszka - łotewski/łotyski (-ysz 型)
などがあるが、いずれもマイナーである。

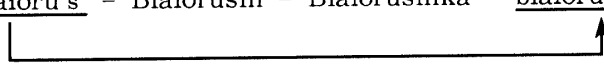
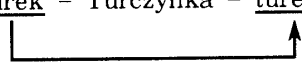
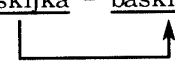
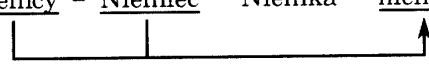
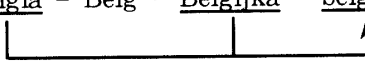
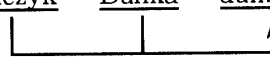
3. 住民名(女性形)の導かれ方

住民名(女性形)は接尾辞 -ka をとるが、住民名(男性形)からの派生のパターンにより、次のように分けて考えることができる。

3. 1. 住民名(男性名)にそのまま付加するもの
例: Mongołka < Mongoł
3. 2. 住民名(男性名)の接尾辞の一部ないし全体を取ってから添加するもの
例: Japonka < Japończyk (接尾辞の全体を交替)
 Łuzyczanka < Łuzyczanin (接尾辞の一部を交替)
3. 3. 「繋ぎの形態素」を必要とするもの
例: Greczynka < Grek (「繋ぎの形態素」-yn-)

4. 形容詞形と他の形との関係

地名ないし民族名から派生する形容詞形は、接尾辞 -ski もしくは -ki (もとの語が、-c、-d、-dz、-t で終わっている場合) を付加することによって得られる⁽²¹⁾。派生源により、次のような分類が可能である。

4. 1. 地名から派生するもの
例: Białoruś - Białorusin - Białorusinka - białoruski

4. 2. 住民名(男性形)から派生するもの
例: Turcja - Turek - Turczynka - turecki

4. 3. 住民名(女性形)から派生するもの
例: Baskonia - Bask - Baskijka - baskijski

4. 4. 地名および住民名(男性形)から派生するもの
例: Niemcy - Niemiec - Niemka - niemiecki

4. 5. 地名および住民名(女性形)から派生するもの
例: Belgia - Belg - Belgijka - belgijski

4. 6. 住民名(男・女性形)から派生するもの
例: Dania - Duńczyk - Dunka - duński


4. 7. 地名および住民名(男・女性形)から派生するもの

例: Ukraina - Ukrainiec - Ukrainka - ukraiński



4. 8. ポーランドの地名から派生する形容詞形について

ポーランドの地名に関しては、以上のいずれにも該当しないものが少なくない。“予想外”の派生語が出てくるのは、歴史的な理由や方言の問題などによる。

例えば、Leszno の形容詞形は leszczyński であるが、これなどは、Leszno が興った14世紀には Leszczno という名であったのが、その後、地名に関しては子音が1つ減り発音しやすくなったものの、形容詞形については、母音が挿入されることで子音が連続するという難点が克服され、結果的に現在に至るも -cz- という音が保たれているのである⁽²²⁾。

ポーランドの地名については、当該地の住民がその形の決定権(すなわち、正しい形を定めること)をもつ、というのが原則である⁽²³⁾。Proszowice の形容詞形としては proszowicki という形が浸透しているが、地元では proszowski という形が今も用いられている⁽²¹⁾。この場合、少なくとも proszowski の形を誤りとすることはできないはずである。

babimojski ≪ Babimost、konecki ≪ Końskie、nizański ≪ Nisko、średzki ≪ Środa、ujejski ≪ Ujazd 等、ポーランドの地名の場合、類推では到底その形容詞形を導けないものが少なくない。

5. 結びにかえて

以上、さまざまな地名や民族名を例にとり、そこから派生する語彙について分析を試みた。結果として、派生の実態は多様であり、一定の型の存在は認めうるものの、完全な法則性を導き出せるほどには整然としたものでないことが明らかである。もっとも、筆者が目を通した地名や民族名は主要なものに限られており、万全を期すためには、今後、辞書や百科辞典だけでなく、広く新聞・雑誌等の媒体にも注意を払っていく必要がある。

ところで、ポーランド人にとってあまりなじみのない地名が、ある時突然身近になった場合、その派生語が存在すると、伝達上都合がよいはずである。そうした時、どのようにして“新語”は生まれていくのであろうか。

1960年からのコンゴ紛争を例にとると、この時ポーランドのマスコミは Kongo の形容詞形として、kongijski、kongolański、kongowski などを用いていたようである⁽²⁵⁾。このうち、現在一般に正しい形として認められているのは、kongijski だけである⁽²⁶⁾。すでに見たように、「繋ぎの形態素」-ij- は、派生形容詞においてかなり頻繁に用いられている。-olan- という「繋ぎの形態素」は他に例がなく、kongolański を正しい形として支持している言語学者は、管見では、皆無である。kongowski については論争的で、この形を1つの可能性として支持する研究者もいれば⁽²⁷⁾、どちらかといえば否定的な見解に立つ者もいる⁽²⁸⁾。前者の人々は、lipnowski ≪ Lipno、kutnowski ≪ Kutno などの派生の実例を挙げ、その根拠を説明している。しかし、-ow- という「繋ぎの形態素」は、外国の

地名においてはほとんど現れることがないことから、拙文の筆者は後者の研究者に組み込んでいる。

派生語の中には、ラテン語の影響しているものがあることについては、既に述べた。ところが、最近用いられるようになった語彙については、Kongo の例を見ても明らかのように、ラテン名は考慮されておらず、派生語はもっぱら既存の語形からの類推に依っていることは興味深い。

コンゴのケースは、国名が既にポーランド人に知られており、その後住民名や形容詞形が問題になったという例である。このように地名が出発点になっている場合には、-anin 型や -czyk 型に属するものが圧倒的である。しかし、ポーランド人にとってまず民族名が知られており、のちにその国名ないし地域名が問題になるという逆のケースもあるはずである。歴史的に見て、ポーランド近隣の諸国家の多くがこれに属するものと思われるが、この場合、住民名（都市住民を表すものは除く）で -anin 型や -czyk 型をとっているものは少数である。すなわち、一般論として、地名⇒住民名ないし形容詞形、という派生の場合には、-anin 型ないし -czyk 型になり、民族名（または住民名）⇒形容詞形ないし地名の場合には、それ以外のパターンに属すといえるであろう。

時には、頻繁に出てくる地名であっても派生語が全く用いられない場合もある。例えば、1972年の冬季オリンピックのあとも、筆者の観察の範囲では、Sapporo（札幌）の派生語は出てきておらず、また地理的にもさほど遠くない Oslo に対しても派生語はない。この理由について筆者は研究調査中であるが、少なくともこの2語に関しては、音構造からポーランド語化が難しいのだという説明は成り立たないであろう。

本稿では一貫して、単数主格形のみを研究対象にしてきたが、複数や斜格にも目を転ずると、分類はより一層複雑になる。例えば、

Ameryka - Amerykanin - Amerykanka - amerykański

Rabka - rabczanin - rabczanka - rabczański

は共に 2. 1. 2. 型に属すが、住民名（男性形）の複数生格では、Amerykan - ów、rabczan - 0 というふうに別の語尾をとっている。

他のスラヴ語との比較検討も興味深い。地名が全く同じでも、派生語や格変化が異なるといった例は、枚挙に暇がない。

本稿では母音交替や子音交替については深入りしなかったが、これらを含めて問題を検討するならば、さらに正確に派生の実態を知ることができるであろう。

これらについては、今後の研究課題とし、稿を改めて論ずることにしたい。

- 注 -

文献は[]に番号で示す。

1 ruotsalainen ≪ Ruotsi, suomalainen ≪ Suomiの2つだけが例外である。

2 例えば、住民名については、「mieszkaniec (mieszkanica) + 地名の生格」で、形容詞形については、地名ないし民族名の生格で代用することができる。

- 3 [1]159頁、[3]121-122頁、[4]574-575頁、[23]25-26頁。[10]236頁、[18]532頁、[19]413頁は、nowohuckiの形を勧めている。
- 4 詳細は[16]を参照のこと。
- 5 やや古いが、[8]の文献目録を参照されたい。
- 6 Malbork - malborczyk - malborskiは、-czyk型に属する数少ない1つである。Malborkは13世紀後半にドイツ騎士団により建てられた町であるが、ドイツ語ではMarienburgとなる。-burgで終わる都市は、例外なく-burczyk, -burka, -burskiになることから、Malborkの派生の形態は説明できよう。[24]を参照されたい。
- 7 [11]12頁。
- 8 [19]182頁。
- 9 [11]12頁。[18](336頁)は、クレヤと同じ見解に立っている。
- 10 [11]12頁。
- 11 Phenian - phenianin - phenianka - pheniański (2.1.3型)([18]585頁)
- pheniańczyk - phenianka - pheniański (2.2.2型)([19]501頁)
のように、辞書により見解が分かれているものすらある。
- 12 Laos - Laosyjczyk - Laosyjka - laoski (2.2.1.2.型変種)のような派生を認めている辞書もある([19]290頁)。
- 13 [5]538頁、[18]202頁、[19]6頁。
- 14 「形容詞＋名詞」型の地名の場合、各要素を合わせたものが派生語になることが普通である。
例: Jelenia Góra - jeleniogórzanin - jeleniogórzanka - jeleniogórski
Nowy Sącz - nowosądeczanin - nowosądeczanka - nowosądecki ([18]378頁および533頁) なお、[2]240頁、[3]121頁も参照のこと。
- 15 [19]863頁。
- 16 [13]204-205頁、[14]561頁を参照されたい。
- 17 [11]9-10頁。かなり確率の高い法則と思われるが、それでも
Norwegia - Norweg - Norweżka - norweski
Holandia - Holender - Holenderka - holenderski
Słowenia - Słoweniec - Słowenka - słoweński
などのような例外がある。
- 18 [7]51頁。
- 19 [19]37頁。
- 20 [11]14頁。
- 21 [9]71頁。
- 22 [5]554-555頁、[12]190-191頁、[15]183-184頁、[17]128頁。
- 23 [13]189頁。
- 24 [3]119頁、[4]576頁。
- 25 [20]337-340頁。
- 26 [6]96頁、[10]175頁、[18]411頁、[19]261頁。かつて、kongoskiが唯一の正しい形とされていた頃もある([21]139頁、[22]222頁)。
- 27 例えば、[3]123頁、[5]553頁、[20]337-340頁など。
- 28 例えば、[13]206頁。

参考文献

- 1 Anon., O pochodne od Nowej Huty, „Jezyk polski” 1955, z. 2.
- 2 P. Bąk, Gramatyka języka polskiego. Zarys popularny, wyd. VI, Warszawa 1987.
- 3 D. Buttler, H. Kurkowska oraz H. Satkiewicz, Kultura języka polskiego. Zagadnienia poprawności gramatycznej, wyd. IV, Warszawa 1986.
- 4 W. Doroszewski, O kulturę słowa. Poradnik językowy, t. I, Warszawa 1962.
- 5 _____, t. II, Warszawa 1968.
- 6 H. Gaertner, W. Kochański oraz A. Passendorfer, Poradnik językowy. Zbiór wskazówek praktycznych dotyczących poprawności językowej, wyd. V, Warszawa 1964.
- 7 R. Grzegorzyczkova, Zarys słowotwórstwa polskiego. Słowotwórstwo opisowe, wyd. III poprawione, Warszawa 1979.
- 8 K. Handke i E. Rzetelska - Feleszko, Przewodnik po językoznawstwie polskim, Wrocław 1977.
- 9 M. Jaworski, Podręczna gramatyka języka polskiego, wyd. IV zmienione, Warszawa 1986.
- 10 M. Kniaginina i W. Pisarek, Poradnik językowy. Podręcznik dla pracowników prasy, radia i telewizji, wyd. II poprawione i uzupełnione, Kraków 1969.
- 11 B. Kreja, Problematyka słowotwórcza derywatów od nazw geograficznych we współczesnym języku polskim, „Gdańskie studia językoznawcze” 1979, nr 2.
- 12 J. Miodek, Rzecz o języku. Szkice o współczesnej polszczyźnie, Wrocław 1983.
- 13 _____, Odpowiednie dać rzeczy słowo. Szkice o współczesnej polszczyźnie, Wrocław 1987.
- 14 Polszczyzna piękna i poprawna. Porady językowe, wyd. II zmienione i rozszerzone, Wrocław 1966.
- 15 St. Rospond, Słownik etymologiczny miast i gmin PRL, Wrocław 1984.
- 16 J. Rozwadowski, Wortbildung und Wortbedeutung, Heidelberg, 1904, tłum.: Wybór pism/ t. III, Warszawa 1960.
- 17 K. Rymut, Nazwy miast Polski, wyd. II uzupełnione, Wrocław 1987.
- 18 Słownik ortograficzny języka polskiego wraz z zasadami pisowni i interpunkcji, pod red. M. Szymczaka, wyd. VII rozszerzone i poprawione, Warszawa 1986.
- 19 Słownik poprawnej polszczyzny PWN, pod red. W. Doroszewskiego i H. Kurkowskiej, wyd. II, Warszawa 1980.
- 20 E. Smułkowa, Kongo nie tylko w polityce, „Jezyk polski” 1960, z. 5.
- 21 St. Szober, Słownik ortoepiczny. Jak mówić i pisać po polsku, Warszawa 1937.
- 22 _____, Słownik poprawnej polszczyzny, wyd. VI uzupełnione, Warszawa 1968.
- 23 W. Taszycki, Wyrazy pochodne od nazwy miejscowej „Howa Huta”, „Poradnik językowy” 1953, z. 2.
- 24 渡辺克義「ポーランドの都市 — その歴史と地名の由来 —」宮島直機編『もっと知りたいポーランド』（弘文堂、近刊）所収。

本稿は、日本言語学会第102回大会(1991年6月9日、於東京外国語大学)での筆者の報告「地名ないし民族名から派生するポーランド語の語彙について」に基づいて作成したものである。大会では、学習院大学・下宮忠雄教授並びに東京外国語大学・千野栄一教授から貴重なご指摘を賜った。記して、感謝の意を表したい。

Derivatives of Geographical Names in the Polish Language

Katsuyoshi WATANABE

Derivatives of geographical names in Polish are sometimes very controversial, because there aren't simple and easy ways in word-formation. The method of these derivatives is the subject of this article.

Roughly speaking, there are four types of the male forms of inhabitants: (1) *- anin* (ex. *Kampuczanin*, *Morawianin*, *szczecinianin*), (2) *- czyk* (ex. *Cypryjczyk*, *Ekwadorczyk*, *malborczyk*), (3) *- ∅* (ex. *Ajnos*, *Chorwat*, *Pers*), and (4) the others (ex. *Anglik*, *Austriak*, *Litwin*). They can be classified into smaller groups, if we take into account "connective morphemes."

The female forms of inhabitants always have the suffix *-ka*. There are three types of derivation: (1) *-ka* is added directly to the male form (ex. *Hiszpanka* < *Hiszpan*), (2) *-ka* is added after the changing of a part or the whole of the suffix of the male form (ex. *olsztynianka* < *olsztynianin*), and (3) "connective morphemes" are needed (ex. *Greczynka* < *Greki*).

As for adjectives, we can classify them into seven types: (1) adjectives directly derivative from geographical names (ex. *litewski* < *Litwa*), (2) adjectives derivative from the male forms of inhabitants (ex. *turecki* < *Turek*), (3) adjectives derivative from the female forms of inhabitants (ex. *baskijski* < *Baskijka*), (4) adjectives derivative from both geographical names and the male forms of inhabitants (ex. *niemiecki* < *Niemcy*, *Niemiec*), (5) adjectives derivative from both geographical names and the female forms of inhabitants (ex. *belgijski* < *Belgia*, *Belgijka*), (6) adjectives derivative from both forms of inhabitants (ex. *duński* < *Duńczyk*, *Dunka*), and (7) adjectives derivative from all the other forms (ex. *ukraiński* < *Ukraina*, *Ukrainiec*, *Ukrainka*). Adjectives of Polish geographical names however often have "unexpected" forms from their historical or dialectal reasons.

The influence of the Latin language is often observed in derivatives (ex. *azjatycki* < *Asiaticus*), but there aren't such examples in the recent derivative vocabulary of foreign geographical names. They are produced just on the analogical basis.